京極読書新聞 ＜第37号＞

発行日　平成24年 9月　1日（土）
京極町生涯学習センター湧学館

京中生にインタビュー 2012 第４回

あんなに暑かった空にも、とんぼの影が…
さあ、読書の秋の始まりです。＜編集部＞

藤田真未さん（1年生）「メジルシ」
米山若那さん（2年生）「そのぬくもりはきえない」

———この2冊、読書感想文で知って読んだのですけれど、どちらもおもしろかった。今年度のコンクール、最大の収穫です。

藤田　以前、草野たきさんの「さくら」という本を読んで、それがすごくおもしろかったので、コンクールもこの人の本で行こうと思いました。

米山　私は表紙の「ぬくもり」という言葉にひかれて読み始めました。

———今日のインタビューはぜひともこの二人でお願いしようと考えました。お二人の感想文、そして2冊の本が私の頭の中で響きあって、もうひとつ別の物語が発生しているような状態です。キーワードは「お母さん」、そして「おばあちゃん」でしょうか。

藤田　「メジルシ」のお母さんは、主人公・双葉の手に目印（ヤケドの傷）をつけてしまうようなとんでもない人なんですけれど、その姿は、鬼のような虐待母親像とはほど遠い。むしろ、母親自体の心もひどく傷ついているような人なんです。

———その原因が「おばあちゃん」。ひと世代前の親子関係にあるという構図は、「ぬくもり」の方でも使われています。

米山　こちらの母も、主人公・羽村波に「お母さん、スポンジみたいだと思う。なにもかもすいとってしまう。言いたいことも、考えてることなんかも。」と言われてしまうほど、波の人生を真綿でくるむように締めつけてくるお母さんです。

———どちらのお母さんも、自分が受けた親（おばあちゃん）の育て方の後遺症に今でも苦しんでいるんですね。ただ、「ぬくもり」には、もうひとり別の「おばあちゃん」が出てくる。

米山　高島のおばあちゃんですね。ハルという犬の散歩を引き受けたことがきっかけで高島のおばあちゃんを知り、二階に残っている少年時代の高島朝夫の幽霊（？）に出会うこともできた。ハル、おばあちゃん、朝夫の「ぬくもり」を受けることによって、波の心の中にも、母親が決めたレールの上を歩むだけじゃない波の人生があらわれてきます。

———波の母のスポンジのような「愛情」と対比させた描き方が見事です。どちらも小説が巧いですね。「メジルシ」のラスト、「双葉はそのおかげで、今度はヤケドの傷に触れることなく、その離陸に成功した。」なんて表現、唸ってしまいましたよ。

藤田　「メジルシ」の本当の理由を知ったことで、双葉の心が変化したように思います。健一くん、美樹さんと呼んでいた名は、元通り、お父さん、お母さんに戻って行きました。この本を読んで、深く自分のお母さんとの関係を考えるようになりました。

———まさに、双葉や波と同じ年齢ですもんね。いい時に、いい本に出会ったと思います。

2，3ページ目に続きます

京極読書新聞は
毎月１日発行です。

藤波太喜くん（2年生）「蜘蛛の糸」
渡辺汐海さん（3年生）「いのちの授業」

―――毎年、このインタビューの季節になると渡辺さんと会ってるような気がします。今年度も入賞すれば、3学年連続パーフェクトですね。

渡辺　どうなんでしょうね。入賞を狙うような意識は別になく、湧学館の本棚からタイトルなどが気に入った本を選んでいます。

―――今年は、それに加えて、久々に古典名作で読書感想文を書いた人があらわれて、こちらも会うのが楽しみでした。

藤波　ぼくも、入賞狙いで芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を選んだわけではありません。昔から芥川の作品が好きで愛読していました。で、いろいろな作品を考えたのですが、最終的に「蜘蛛の糸」にしました。

―――それは、東日本大震災が起こった年ということも関係しているのでしょうか。

藤波　選んだ時には、震災のことは頭にありませんでした。ただ、感想文を書いている内に、「蜘蛛の糸」を書くのならば、東日本大震災のことは書いておかなければならないと気がついたのです。避難所で、ルールを守り、列をなし、一人一個ならば一人一個をもらう日本人の姿。この、海外のメディアも驚きを持って伝えた日本人の姿と、「蜘蛛の糸」の犍陀多（かんだた）の「自分だけ助かろう」とする姿のどちらも書きとめて考えなければ…と思ったのです。

―――この年の読書感想文は、小学生、中学生を問わず、いろんな人が東日本大震災のことを感想文の中でふれています。「いのち」ってことなのかなぁ。「今、生きている」ということの意味をみんなが思った一年でした。

渡辺　寺田惠子さんの「いのちの授業」は、私たちがこの世に生まれてきて、今ここに生きているということが、どれほど奇跡的なことなのかを教えてくれます。

―――授業開始直後の「出産」シーンの寸劇とかなら、まあ、プロの助産師さんならこれくらいやるだろうなぁ…と思って読んでいたのだけど、中盤の、自分の死産した子の話を始めたあたりからは、こりゃすごい人だなぁ…と思い始めました。

渡辺　「助産師」という自分の仕事に、ものすごく生真面目にとりくんでいる人に思えます。**2004**年に長崎県佐世保で起きた「小6女児同級生殺害事件」を、自分の仕事の問題としてとらえ、そこから、命の大切さを伝える行動「いのちの授業」が生まれてくるなんて展開、よほど真剣に自分の仕事や人生を考えていないとできないことだと思います。

―――見えない人には見つからない。逆に、見える人は、日常のどんなに小さな出来事からでも意味を見つけ出す。みんな、京中生インタビューに登場した本、手にとってほしいなぁ。「蜘蛛の糸」なんか**10**分で読めますよ。もしかしたら、その**10**分に、自分の人生の何かが変わる意味が埋まっているかもしれないんだよ。

藤波　ぼくも、最近の小説よりは古典名作の方が心が落ち着きます。芥川なら3ページで書ける短編を、だらだら長い小説にひっぱるのは好みじゃない。ぼくの愛読書は「十五少年漂流記」で、子ども時代から何度も何度も読みかえしています。長編小説というのは、ああいう奥深いものをいうのだと思います。

―――へえ、「十五少年漂流記」ですか。いやー、おもしろいなぁ。ぜひ、そういうセンス、大事に育てていってくださいね。おとなになっても、なくさないでください。

7月21日（土）、白老町の仙台藩元陣屋資料館にて「文芸作品を走る胆振線」という講演を行いました。

この講演記録は、9月11日（火）、15日（土）に開かれる「秋の製本教室」の予定作品「胆振線作品集 第2版」の末尾に収録いたします。＜湧学館 新谷＞

参加者募集のおしらせ

「秋の製本教室」　定員：5名
　　申込み期限：9月4日（火）
「余市の文学をめぐるバスの旅」
　　定員：20名
　　申込み期限：9月末まで
　　※定員になり次第終了
お申し込みは湧学館（TEL42－2700）まで。
詳細は館内チラシまたはホームページをご覧下さい。

京中生に
インタビュー
2012
第4回

左：米山若那さん（2年生）
「そのぬくもりはきえない」 岩瀬 成子著／偕成社
右：藤田真未さん（1年生）
「メジルシ」 草野 たき著／講談社

左：藤波太喜くん（2年生）
「蜘蛛の糸」（ザ・龍之介収録） 芥川 龍之介著／第三書館
右：渡辺汐海さん（3年生）
「いのちの授業」 寺田 恵子著／学研パブリッシング

余談「平清盛」（8）

＜『平家物語』を読む会＞　講師　村山　功一（むらやま･こういち）

「ドラマ･清盛」は第32回（8/19）となり、清盛は大納言に昇進し、次いで朝廷の最高位である太政大臣に就任、3ヵ月後に辞任という展開を一気に描きます。清盛の生涯で最も晴れがましい出来事を描くにしては、サッと流してしまったように感じました。

『平家物語』は、位人臣をきわめた清盛を“奢れる人”“悪行の人”として語ります。『平家』を読むかぎり、彼は暴虐非道の大悪党といわざるをえません。強引に都を福原（現神戸市）に遷し、後白河院を幽閉し、聖地南都（奈良）を焼き討ちにする…など、晩年の清盛の横暴を、「ドラマ･清盛」はどのように描くのか。興味あるところです。

さて、清盛の晩年に関してはヒストリー（歴史）とストーリー（物語）の狭間にある『平家』をはじめ、『玉葉』（九条兼実）『愚管抄』（慈円）など、同時代の人々の日記･記録などの史料に詳しく描かれています。したがって、ドラマの方もあまり良く知られていない青少年期のように、思い切った演出はやりにくいのでしょう。最近は、ほぼ各種史料から見えてくる清盛像が描かれているようです。太政大臣従一位にふさわしい姿に、少し安心しました。実像としての清盛は、単なる傲岸不遜で感情的な人物だったとは思われませんが、800年にわたって清盛に与えられてきた悪評を、ドラマがどう処理し、どんな清盛を創りだしてゆくのかが、後半部の見どころになるでしょう。

ところで、それなりにそれらしくなった清盛ですが、いまだに「はてナ？」なのは、彼が愛用してやまない“宋剣”です。ドラマでは、出生の秘密を知り落ち込む平太に「強くなれ」と父忠盛が与えたものです（第1回）。なぜ“宋剣”なのかは不明です。おそらく忠盛が宋貿易で手に入れたものか、海賊から奪ったものという設定かも知れません。それはそれでいいのですが、ドラマの清盛は常にそれを携行し、院北面として御所に出仕するときも、さらに保元の乱･平治の乱では大鎧を着用しこの宋剣を佩用（はいよう）（腰につり下げること）して登場します。この光景は不思議です。家系と伝統、武勇と名誉をなによりも重んじる武士の、しかも一族一門の棟梁が、果たして異国の刀剣を身に付けるでしょうか。

平安末期の合戦において太刀は主要武器ではありません。あくまでも弓矢と長刀（なぎなた）が中心であって、刀剣はむしろ補助的です。しかし、太刀･刀剣は甲冑（鎧と兜）とともに武士を象徴する神聖かつ重要な意味を持っていました。武士の“家”には先祖代々嫡流（家長としての家系）に伝えられる“家宝”としての太刀、甲冑があります。たとえば、平治の乱の際清盛の嫡男重盛は平家相伝の“小烏”という太刀を佩（は）き、義朝の嫡男頼朝は源氏重代の鎧“源太産衣”を着て“髭切”を佩用しています。このときの清盛の太刀は重代のものかどうかは分かりませんが、〈～黒塗りの太刀を帯（は）き〉と『平治物語』には見えます。少なくても宋剣ではなさそうです。もし、宋剣ならばきわめて異例であり珍しい装束だから、必ず特筆されるのではないでしょうか。この時代すでに太刀は“日本刀”を意味することからも、清盛が腰に帯びていたのは宋剣ではありません。

たしかに“異例”づくめの清盛ですが、だからといって武士の象徴である刀剣も異国のものを愛用したとは考えられません。武士にとって太刀･刀剣は武器であると同時に、現在の私たちが考える以上に、強く武士の精神を支えるものとして神聖視されていたものと思うのです。

第1回からずっと気になっていた清盛の“宋剣”について、私見を述べてみました。　〔以下次号〕

【語意】
･相伝（そうでん）　… 先祖代々受け継ぐこと。またそのもの。
･重代（じゅうだい）… 先祖から代々伝わっていること。またそのもの。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101　京町字京極158番地1
TEL　0136-42-2700（代表）
FAX　0136-42-2032
E-Mail　yugakukan@town-kyogoku.jp

ホームページもご覧ください
http://lib-kyogoku.cubet.com/